

臨床実践を通じた障害のタイプによる関係性と 遊びの発達との関連

山下 恵子*・安東 末廣**

The Connection between the Child-therapist Relationship and
the Development of Play according to Handicap Types

Keiko YAMASHITA and Suehiro ANDO

1. はじめに

近年、子ども達の育ちを援助するための施策や新たな取り組みが始まっている。山下・安東は、1998年から虐待を受けた幼児の援助過程や援助構造、更に、初期の危機介入についての研究を行ってきた。1998年の研究では、虐待を受け施設に入所した子どもの心理的ケアのプロセスを述べ、プレイセラピーにおいて、退化化や虐待のフラッシュバック再体験、反復的な強迫体験が繰り返され、その後これらの行動から抜け出し、情緒的な安定や自己概念の形成がみられるようになった事例を報告し、支援の際のグループアプローチの重要性についても言及した(山下・安東 1998)。この研究をもとに、1999年には2つの援助ケースの検討を行い、ケア体制と発達的な援助の有効性を検証した。特に、脳障害のあるケースの場合には、医療機関との連携によるグループアプローチの有効性を確認した(山下・安東 1999)。2つのケースでは、被虐待児の個別ケアにおいて、基本的な信頼関係の築きにくさ、認知発達の遅れや攻撃性などが改善され、西澤哲(1999)の言うポストトラウマティック・プレイが再現され、情緒の安定や自己概念の形成がなされた事を報告した。更に、プレイを発展させた新たな構造として、音楽療法をケアの技法の中に導入し、音楽療法の目的と位置づけを行った。ここでは、北山修(2000)が“二者間内交流と二者間外交流”で指摘しているように、治療初期の音楽を使った抱擁的な空間が、ポストトラウマティック・プレイを促進していく事を確認し、音楽とプレイを組み合わせた手法が心理的な援助として可能である事を述べた(山下・安東 2001)。また、ケアの成果を異なった視点から検討するために、被虐待児の発達的な変化から考察し、入所時、3ヵ月後、6ヵ月後と発達状況を測定し、ケアによって17のケースの発達指数に上昇が見られたことを確認した(山下・安東 2003)。

これらの臨床研究を発展させ、山下(山下 2002)は人と人との繋がりに焦点をあて、被虐待児や障害のある子ども達、更に障害者への臨床実践を通して、セラピストとクライアントとの繋がりがどのように発達していくのかについて、声の出現と関係性という観点で整理した。

*宮崎学園短期大学 **宮崎大学

ここでは、繋がり状態を示すために、関係性を二者非繋合（けいごう）状態、瞬間的二者繋合状態、断続的二者繋合状態、持続的二者繋合状態の4つに分け整理した。その結果、クライアントとセラピストとの繋合が深まれば深まるほど、クライアントの声は生成されるという結論を得た。

このような先行研究をもとに、本研究では、心理臨床的なアプローチを通して、障害のある子ども達の発達状況、プレイ、子ども達とセラピストとの関係性の構築という視点を統合する試みに着手した。

言葉の遅れ、全体的な発達の遅れ、身体運動の遅れ、多動傾向などを主訴として臨床機関を訪れる子ども達の場合、まずアセスメントが行われ、その多くが継続来談になることが多い。これまでの臨床実践で、子どもの発達状態と障害のタイプによってさまざまな組み合わせによるグループ分けをおこなってきた。しかし、それは経験に頼るものがほとんどで、その詳しい分析や経過の検討はあまりなされていなかった。

そこで、本研究では、二つの目的を立てた。一つ目は、障害のタイプと発達特性との関係を検討し、支援の方向性を明確にすること、二つ目は、タイプごとに関係性の変化に注目し、どのような特徴が見られるかを明らかにし、支援の際にそのプロセスを見極める判断材料とすることである。

2. 方法

2-1 対象

対象は、X年からX+18年の間に、大学内の発達臨床機関を訪れた114名の幼児と児童である。男子65名、女子49名である。来校時の平均年齢は、4歳5カ月である。

2-2 方法

初回面接時に「新版K式発達検査」を実施し、姿勢・運動、認知・社会、言語・適応の3つの側面から発達評価を行う。発達指数（DQ）と障がいの程度の分類を次のようにした。最重度はDQが10～19、重度はDQ20～34、中度はDQ35～49、軽度はDQ50～69、境界域はDQ70～79、健常域はDQ80以上とした。

次に、各タイプによる関係性の変化の検討については、10の個別のケースをもちいて、障がいのある子どもたちとセラピストとの関係性を、声の出現という観点から考察した山下（2002）の先行研究をもとに検討するものである。ここでは、先行研究の用語を用い、以下のように表記を変えた。つまり、関係性なし、瞬間的關係性、断続的關係性、持続的關係性の4つである。

関係性を表す4つの用語は、次のように定義した。

「関係性なし」とは、二者間に相互の繋がりが見られない状態をいう。これは、二者間に音や音楽、声、言葉、身体動作などによる、言語的あるいは非言語的な相互交流が見られない状態をいう。

「瞬間的關係性」とは、二者間に瞬間的な相互の繋がりが見られる状態をいう。これは、二者間に音や音楽、声、言葉、身体動作などによる言語的あるいは非言語的な相互交流が瞬間的に見られる状態をいう。

「断続的關係性」とは、二者間に断続的な相互の繋がりが見られる状態をいう。これは、二

者間に音や音楽、声、言葉、身体動作などによる言語的あるいは非言語的な相互交流が断続的に見られる状態をいう。

「持続的関係性」とは、二者間に持続的な相互の繋がりが明確に見られる状態をいう。これは、二者間に音や音楽、声、言葉、身体動作などの言語的あるいは非言語的な相互交流が持続的に見られる状態をいう。

また、発達支援で用いられるセラピーの技法は、ミュージックセラピーとプレイセラピーである。セラピストは臨床心理士と音楽療法士で、チームでセラピーを行っている。

3. 発達検査の結果及び考察

3-1 発達のタイプ

来校者全員の主訴、診断名、新版K式発達検査の結果をもとに、発達のタイプを分類すると大きく3つに分ける事ができた。それらは、A：自閉症タイプ、B：全体的発達遅滞タイプ、C：肢体不自由タイプである。Aの自閉症タイプは、身体発育には遅れは見られないが、落ち着きのなさ、多動傾向及び言葉の遅れを示している。初回には診断名はついていなかったが、数年後に自閉症や広汎性発達障害との診断がついたケースである。Bの全体的発達遅滞タイプは、身体発育の遅れや言葉の遅れなど全体的な発達の遅れを主訴とする場合が多く、極小未熟児や子宮内発育不全、全体的発達遅滞などの診断名が付けられていたケースである。Cの肢体不自由タイプは身体的な遅れが顕著であり、初回では、脳性麻痺や水頭症、二分脊椎などの診断名がついた子どもたち達がほとんどであった。自閉症タイプは38名、全体的発達遅滞タイプは39名、肢体不自由タイプは37名であり、全体の比率を下図に示す。

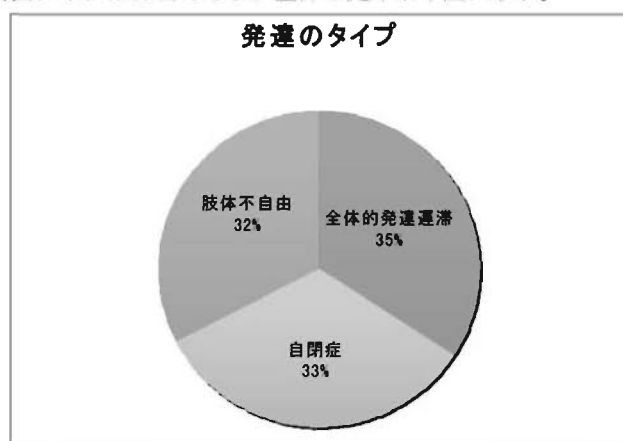


図1. 発達のタイプ

3-2 自閉症タイプの発達検査結果

自閉症タイプの子どもたちへの発達検査を実施した結果、重度4名、中度10名、軽度7名、境界域2名、健常域8名、測定不能は7名であった。発達の程度にバラつきが見られ、約3割は境界域や健常域の発達を示した。測定不能の7名は、一定時間の着席が困難であり、多動の傾向にあり、テストの指示が通りにくい子どもたちで、学習に取組む姿勢には至っていない

子ども達であった。

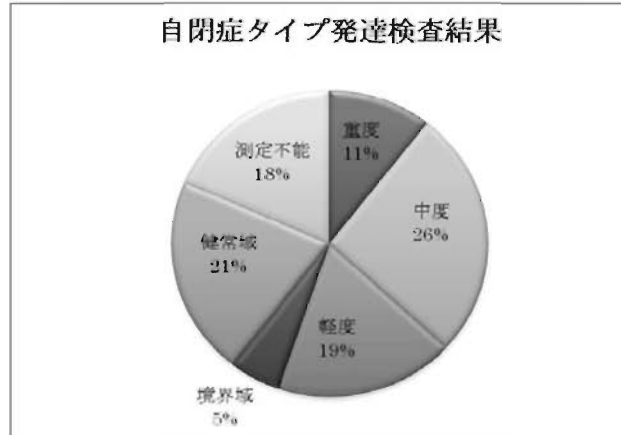


図2. 自閉症タイプ発達検査結果

3-3 全体的発達遅滞タイプの発達検査結果

全体的発達遅滞タイプの子どもたちへの発達検査を実施した結果、重度6名、中度18名、軽度11名、境界域1名、健常域2名、測定不能は1名であった。全体的発達遅滞タイプでは、測定不能は1であり、殆どの子ども達に発達検査を実施できた。実施の結果、89%の子どもたちに重度、中度、軽度の遅れが見られた。

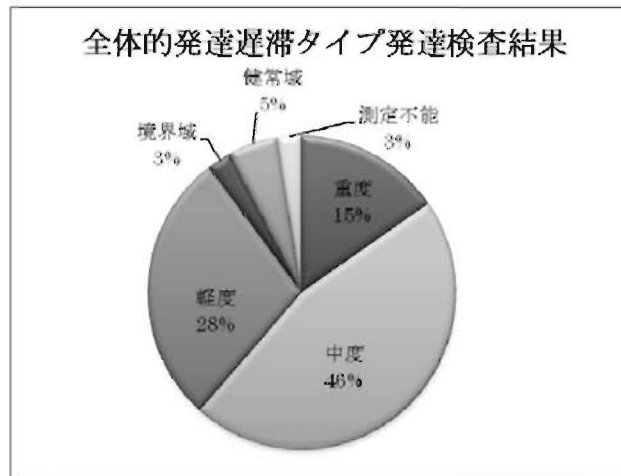


図3. 全体的発達遅滞タイプ発達検査結果

3-4 肢体不自由タイプの発達検査の結果

肢体不自由タイプの子どもたちへの発達検査を実施した結果、最重度9名、重度3名、境界域1名、測定不能は24名であった。測定不能の24名は、新版K式発達検査における検査項目を実施することができず、身体的、知的な発達において最重度の遅れが見られ、重症心身障害児である。検査結果全体から重度の発達の遅れのある子どもたちが多いと言える。

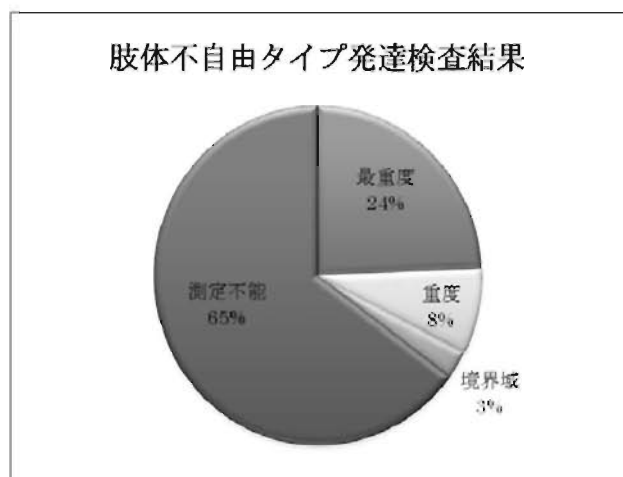


図4. 肢体不自由タイプの発達検査結果

3-5 発達タイプ別認知・適応領域と言語・社会領域の分布

発達のタイプ別に、認知・適応領域と言語・社会領域の発達指数をもとに分布図として下図に記す。

縦軸は、認知・適応領域の発達指数を示し、横軸は言語・社会領域の発達指数を示した。このデータは、数値として測定できたケースのみを対象とした。

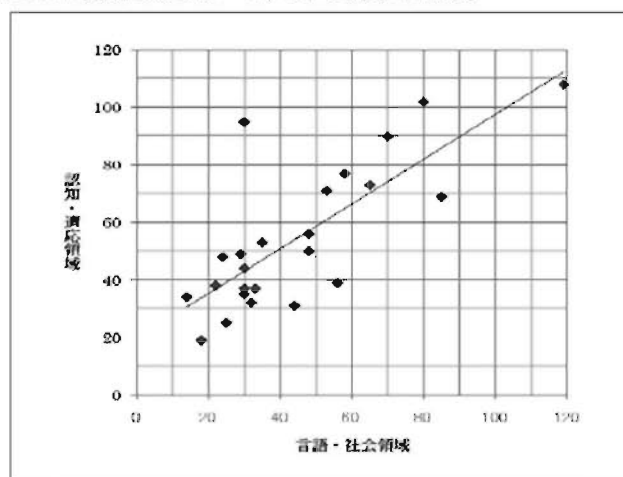


図5. 自閉症タイプ認知・適応領域と言語・社会領域の分布

図5の自閉症タイプは、認知・適応、言語・社会適応との間に有意な相関が見られるが(0.77)、このタイプにおける発達の様態の多様性が見られる。自閉症タイプは、認知・適応領域と言語・社会領域が広範に分布し、このタイプには発達の様態のばらつきが見られる。

図6の全体的発達遅滞タイプは、認知・適応、言語・社会適応との間に有意な相関が見られるが(0.73)、このタイプにおいては自閉症タイプ程の多様性は見られない。全体的発達遅滞タイプは、DQ40-60の間に密集し、二つの領域はほぼ同じ数値にある。

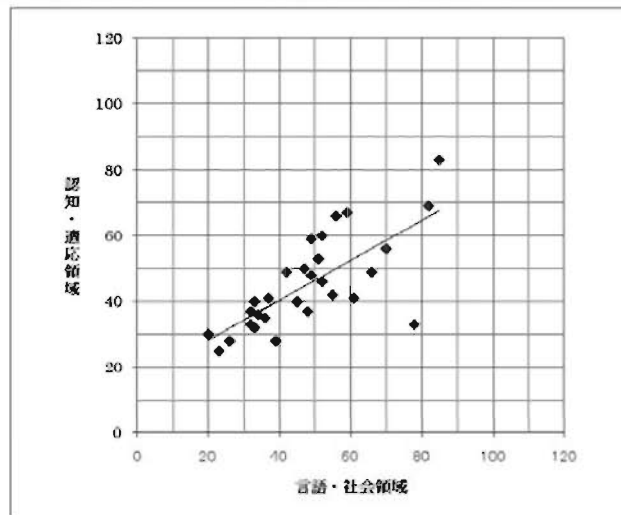


図6. 全体的発達遅滞タイプ認知・適応領域と言語・社会領域の分布

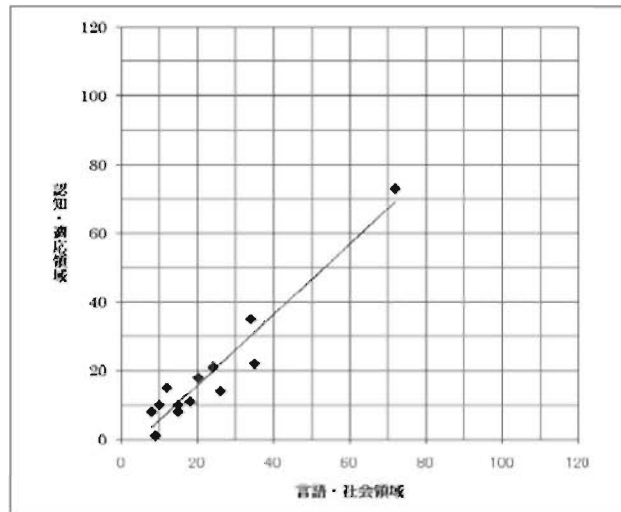


図7. 肢体不自由タイプ認知・適応領域と言語・社会領域の分布

図7の肢体不自由タイプは、認知・適応、言語・社会適応との間に極めて有意な相関が見られるが(0.96)、全体的に低い数値に密集しているが、認知・適応領域に比べ、言語・社会領域

が若干高い傾向にある。

これらのことから、認知・適応領域と言語・社会領域には有意な相関が見られるが、その分布は、それぞれのタイプによって異なった分布であったと言える。

4. 個別セラピーの結果及び考察

ここでは、これまでの来校者中から10の個人ケース(山下2002)の実際を提示することにより、クライアントとセラピストとの関係性の変遷、発達援助のプロセスと遊びとの関係を明確にすることを目的とする。

4-1 個人ケースのセッション実施状況

これから述べる10の個人ケースのセッション実施状況を下表に示す。

表1 個人ケースのセッション実施状況

個人ケース	セッションの頻度及び時間	期 間	実施回数	タイプ
1 A児	月2回40分のセッション	7ヶ月間	14回	自閉症タイプ(軽度)と被虐待
2 H児	月2回50分のセッション	7ヶ月間	10回	自閉症タイプ(軽度)と聴覚障害
3 D児	月2回50分のセッション	4年間	92回	自閉症タイプ(中度)
4 B児	月3回50分のセッション	1年1ヶ月間	28回	自閉症タイプ(重度)
5 C児	月1-2回50分のセッション	1年10ヶ月間	24回	自閉症タイプ(重度)
6 J児	月1-2回45分のセッション	9ヶ月間	18回	自閉症と全体的発達遅滞との複合タイプ(重度)
7 E児	月2-3回30分から45分のセッション	3年9ヶ月間	62回	全体的発達遅滞タイプ(中度)
8 G児	月2回50分のセッション	4ヶ月間	8回	全体的発達遅滞タイプ(中度)
9 F児	月2回50分のセッション	3ヶ月間	5回	肢体不自由タイプ(重度)
10 I児	月1-2回50分のセッション	1年8ヶ月間	19回	肢体不自由タイプ(最重度)

4-2 ケース1

4-2-1 A児のプロフィール

<クライアント> A児 (男児、開始時2歳4ヶ月)

<開始時の主訴> 身体的虐待とネグレクト、言葉の遅れ

<開始時の様子> 虐待により、相談機関より来所する。両頬に出血斑があり、発語は見られない。人見知りはなく、職員の顔を見ながら作り笑いをする。入所時、新版K式発達検査を実施しDQ78。認知面は2歳1ヶ月、言語・社会面は1歳3ヶ月レベルであり、認知面に比べ、言語面の落ち込みが激しい(0週目)。

4-2-2 セラピーの方法

＜開始時に設定した目標＞音や音楽の関わりによって、セラピスト（以下Thと記す）との信頼関係を作り、コミュニケーション機能を回復する。

＜セラピーの構成＞ 個人セッションを、月2回、1回につき40分行った。Thは、Th 1名、コ・セラピスト（以下、Co-Thと記す）1名。Co-Thは、A児の担当保育士である。

＜セラピーの内容＞ 歌を歌う活動では、《パンやさんにおかいもの》（おざわたつゆき）、《いっばんばし にほんばし》（中川ひろたか）というくすぐりなどを期待するふれあい遊びを行う。音や音楽を聴きながら身体を動かす活動では、音楽に合わせて歩く、走る、バックする、回転することやA児の動きに楽器で音を付ける活動を行う。打楽器による即興活動では、2個のドラムを使い、クライアントとThがドラムを介して向かい合い、ドラムを同時に叩いたり、交互に叩いたりする。更に人形などの遊具を使ったごっこ遊びを行う。

4-2-3 A児の経過

A児の個人セッションを、合計14回行った。ここでは、A児の声の生成に重要な意味を持った6つのセッションを取り上げて記述する（表2 ケース1（A児）の関係性の変遷参照）。

表2 ケース1（A児）の関係性の変遷

	① A児（自閉症タイプ：被虐待）
関係性なし	<p>＜セッション1（1週目）＞</p> <p>A児は、入室するなり部屋中を動き回る。Thは、膝に抱いて歌いかけようとする。A児は、抱かれようとせず拒否的に上目遣いでセラピストを見る。その後、ThとCo-Thが毛布を広げて、「おいで」と言うとA児はそこに寝転がる。ThとCo-Thは、A児を優しく布にくるみ歌いかけながら揺らす。A児はThに視線を注ぎ気持ちよさそうにする。</p>
瞬間的関係性	<p>＜セッション3（5週目）＞</p> <p>A児はドラムの活動で、Thに視線を注ぎながら、ドラムの周りをぐるぐる回ったり、持ったマレットで畳をひっかいたりしている。その間ThはA児との距離を保ちながら、鏡に映った像のようにA児の動作を真似る。A児は、チラチラとThを見始める。</p>
断続的関係性	<p>＜セッション3（5週目）＞</p> <p>A児とThはドラムを挟んで向き合う。双方が剣道のような構えをし、A児とThは振り上げた両手に体中の力を入れ、2人一緒にドラムを1打強打する。叩き終わるとThを見つめ、微笑する。</p> <p>＜セッション5（9週目）＞</p> <p>A児とThは、キーボードの音に合わせて身体を動かす活動を行う。A児は、キーボードを弾くThを見ようとせず、ウロウロと動き回る。Thは、キーボードを弾くことを止め、ボンゴを抱えてA児の近くに行く。Thが近づくと、A児はわざと逃げる。逃げるテンポに合わせて、Thがトントンとボンゴを鳴らすと、A児は驚いた表情をしてThを見る。次に、A児はThを見ながら走り始める。</p>

持続的 関係性	<p><セッション5 (9週目)> Thが、A児の走るテンポに合わせてボンゴを叩きながら一緒に走ると、A児はThを見ながら自らの動きを止める。それと同時にThが音を止めると、一瞬の後、両手足をばたつかせてその場で動く。それに合わせてThが自分の足をばたつかせながらボンゴを叩く。Thをじっと見つめた次の瞬間、A児は床に仰向けになり、両手足をばたつかせながら「ギャハハ」と声を出して大笑いする。しばらく笑うと、A児は「アハハ」とセラピストを見ながら声を出して笑い、Thから逃げようとする。Thは「まてまてまてまて」と言いながら、ボンゴでリズムを取ってA児を追いかける。A児は「アハハ」と声を立てながら笑い、「ハー」と言って床に寝転がる。Thも床に寝転がり2人は手をつなぐ。</p> <p><セッション6 (11週目)> 動作を付けながら歌を歌う活動において、A児はCo-Thの所へ行き顔をうずめたかと思うと、息を荒げながらパイと横を向く。A児はCo-Thの足に噛みついた後、Co-Thのかぶっていた三角巾を引っ張り取り、すぐ横で寝たふりをする。Thが「Aくんどうしたの」と聞くと、A児は「フンフン」と鼻息を音にする。その後、Thが50cm位のミルク飲み人形を用意すると、A児は人形を横抱きにして撫でた後、マレットを哺乳瓶に見立てて人形に飲ませる。Thが「よしよし大丈夫」と言うと、Thを見て「ヨーヨー」と声を出す。</p> <p><セッション8 (17週目)> 人形遊びの場面で、Thが何も入っていない哺乳瓶を用意すると、A児は人形の口に哺乳瓶を当て飲ませようとする。Thが、「Aくんも飲む？」と聞くと「ウン」とうなずく。ThがA児を横抱きにし哺乳瓶をくわえさせるとA児は哺乳瓶を吸い、1～2分すると満足そうな表情をして哺乳瓶をThに渡す。</p> <p><セッション14 (28週目)> 楽器の音を聴きながら身体を動かす活動では、ThがA児の目の前でドラムを大きく一打叩くと、A児はドラム音に合わせて「どーん」と言いながら飛び上がる。ギロの音では、音に合わせて身体をくねらせる。次にThと役割の交代をし、セラピストがA児の出す音に合わせて動くと、Thを見て「アハハ」と笑う。</p>
------------	---

4-3 ケース2

4-3-1 H児のプロフィール

<クライアント>H児 (男児、開始時4歳4ヶ月)

<開始時の主訴>聴覚障害のため音楽を楽しむことができない

<開始時の様子>H児は、身振りや手話によって日常のコミュニケーションを行う。ぴょんぴょん飛び回って、ウルトラマンやガオレンジャーの動作を真似る。母親がこれはウルトラマン、これはガオレンジャーと動作の意味をThに伝える (0週目)。

4-3-2 セラピーの方法

<開始時に設定した目標>音楽を楽しむことができるようにする。

<セラピーの構成>個人セッションを、月1～2回、1回につき50分行った。Thは、Th1名、Co-Th1名。

<セラピーの内容>音や音楽を聴きながら身体を動かす活動、触覚活動 (ギャザリングドラム、鉄琴やスリットドラム等に直接触れて音の振動を体感する活動)、ドラムを使った即興活動を行う。

4-3-3 H児の経過

H児の個人セッションを合計10回行った。ここでは、H児の声の生成に重要な意味を持った4つのセッションを取り上げて記述する(表3 ケース2 (H児) の関係性の変遷参照)。

表3 ケース2 (H児) の関係性の変遷

② H児 (自閉症タイプと聴覚障害)	
関係性なし	<p><セッション1 (3週目)></p> <p>H児とThは、木琴を挟んで向かい合って座る。Thが木琴を弾きながら歌い始めるとそれとは全く無関係に、H児は木琴の低音部から1音ずつ順番に両手で触り、1音ずつバス、飛行機、電車と手話で名付けている。</p>
断続的関係性	<p><セッション1 (3週目)></p> <p>身体を動かす活動において、Thがクイーカの振動面にH児の両手をのせる。H児は音の振動が伝わると、Thの顔を見て首をひねる。その振動刺激に合わせて、Co-Thが、身体全体が後ろに引かれるような動作をすると、H児も後ろに動き始める。</p>
持続的関係性	<p><セッション2 (5週目)></p> <p>Thは直径30cmのギャザリングドラムを部屋の真ん中に用意する。H児は、ドラムを見るときすぐに近寄ってきて、そのドラムの上に恐る恐る両手をのせる。H児と向かい合いThはすぐに両手で打面を叩く。H児は一瞬身を固くして緊張した表情をする。Thが両手を上に挙げて連打を止めると、H児はThの顔をじっと見て不思議そうな表情をする。再度Thが連打を始めると、H児は自らの両手を見つめながら真剣な眼差しになる。もう一度Thが両手を挙げて音を止めると、H児は自分から連打を始める。Thが慌ててドラムを叩き始めると、H児はドラムを抱きかかえるようにして、驚いた表情でThを見る。続けてThが連打を行うと、H児は突然驚いた顔をしてThを見て自分の耳の横に両手を当てる。それを見た母親は、「音が聞こえるって言っています。これは、手話で聞こえるという意味です」とH児の動作の意味を興奮してThに伝える。Thは更に連打をすると、ドラムを抱きかかえた様な姿勢のH児は両手を挙げ、Thを見て耳に手を当てた後、両手の人差し指をくるくる回し始める。すぐに母親は、「音がくるくる回るって言っています」と話す。更に連打を続けると、同じ姿勢のままでH児は「ウー」と低い声を出す。その瞬間、Thが慌てて音を止めると、H児は驚いた表情をしてThを見る。2人でじっと見つめ合う。H児はThを見つめながらも一度「ウー」と低い声を出し、すぐさま両耳の横に両手を当てる。セラピストも両耳に手を当て、H児をしっかりと見ながら「聞こえたんだ」というと、歯を見せて微笑み「アーアー」と低い声で口を開けて笑い始め、H児は再度ドラムを抱きかかえる。Thが連打を開始すると、「アウアウ」と笑い始める。しばらくすると自分からドラムを離れる。母親が手話で「どうしたの?」と聞くと、H児はすぐに手話で母親に伝える。母親は次のようにThに伝える。「身体がくるくる回って転げ落ちそうだった。音が聞こえたっていです。どうも自分の声があったみたいです」。母親はそのことを涙を流しながらThに話す。</p>

持続的 関係性	<p><セッション8 (22週目)> 歌を歌う活動では、トトロの絵カードを見せながらThが《さんぼ》の歌を歌う。Thは歌詞に合わせて動作を付ける。絵カードとThの表情をじっと見ているH児は、床に指で絵を描き始める。すぐに模造紙を用意すると、H児は坂道とトンネルを描いたり、草や一本橋を描き始める。その絵を部屋の真ん中に置き、その周りに、段ボールで作ったトンネルや丸木、草の置物を置く。Co-Thは、身体を揺らして拍を取りながら、通常より1オクターブ低い音域で《さんぼ》の曲を弾く。Thは、H児と手をつないで、音楽に合わせて動く。トンネルを潜ったり、丸木橋をまたいで渡ったりする。その後、2人で音楽に合わせて行進すると、拍に合わせて、H児は「アーアーアー」と声を出し始める。最後の音で、セラピストが「アー」と言いながら、両手を伸ばして前に動くと、H児はそれに合わせて「アー」と声を伸ばす。2人の声が途切れると、H児は「アハハハ」と悪戯っぽく笑う。</p>
------------	---

4-4 ケース3

4-4-1 D児のプロフィール

<クライアント>D児 (男児、開始時4歳8ヶ月)

<開始時の主訴>多動と言葉の遅れ

<開始時の様子>遠城寺式・乳幼児分析的発達検査を実施し、移動・運動は2歳から2歳3ヶ月、手の運動は1歳9ヶ月～2歳、基本的習慣は1歳6ヶ月から1歳9ヶ月、対人関係は1歳から1歳2ヶ月、発語と言語理解は算出できない状態であった。これらの結果から、言語の理解は殆ど困難な状態にあり、重度の知的発達の遅れが見られた(0週目)。

4-4-2 セラピーの方法

<開始時に設定した目標>音楽を楽しむことを通して、Thとコミュニケーションできるようになる。

<セラピーの構成>個人セッションを、月2回、1回につき50分行った。Thは、Th1名、Co-Th1名。

<セラピーの内容>音や音楽を聴きながら身体を動かす活動、ドラムを使った即興活動、遊具を使って遊ぶ活動、《ウルトラマンのうた》(宮内国郎)の曲に合わせて、横一列に並んだ楽器を順番に叩き、シンバルで終わって曲を構成していく楽器で演奏する活動を行う。

4-4-3 D児の経過

D児の個人セッションを、合計92回行った。ここでは、D児の声の生成に重要な意味を持った9つのセッションを記述する(表4 ケース3(D児)の関係性の変遷参照)。

表4 ケース3(D児)の関係性の変遷

関係性 なし	<p>③ D児(自閉症タイプ)</p> <p><セッション1(0週目)> D児は入室するとすぐにセラピールームの隣にある楽器庫へと飛び出して行く。D児は棚をひっくり返し、積み木を手にとり、それを両手で回しながらセラピールームに戻ってくる。Thが「ちょうだい」と言って両手で下さいというジェスチャーをするがD児は返そうとせず、再び隣の楽器庫へと走っていく。</p>
-----------	--

瞬間的 関係性	<p><セッション1 (0週目)> 楽器庫に置いてあったスクーターボードを見つけると自分から乗る。Thがスクーターボードを動かすとD児はほくそ笑みを浮かべる。1曲終わり動きが止まると、D児はスクーターボードから飛び降りて部屋を走り回る。その走るテンポに合わせてThはピアノで音付けし、D児が止まった瞬間ピアノを止める。D児は驚いた顔をして、ピアノを弾いているThを見る。次の瞬間には再度D児は部屋を走り始める。Thが再度ピアノを弾くと、走りながらD児の顔は紅潮し始め、「ウー」という興奮したような声を出す。</p> <p><セッション2 (2週目)> D児は、入室するなり、隣の部屋へ突進していく。D児はキョロキョロと部屋を見回し、スクーターボードを見つけると、その前に立ち止まる。Thが「これ」と言いながらスクーターボードを持ってくるとD児はすぐに飛び乗る。Thが歌いながらスクーターボードを引っ張ると、D児は笑みを浮かべる。Thは曲の終了と共に引く手を止め、D児の目の前に指を1本立てて「もう1回する人」とたずねると、D児は「ウー」と答える。</p>
断続的 関係性	<p><セッション8 (12週目)> Thを見ると、自分から近寄りおぼさる。心地よさそうな表情をする。身体を動かす活動では、D児はThにおぼさったままである。音楽に合わせて、D児を背負ったThが走ると、揺れに合わせてD児は「アウアウ」と笑い声をあげる。</p> <p><セッション14 (22週目)> 身体を動かす活動では、トランポリンの活動を行う。Thは「ピョンコピョンコ」と歌いながらD児の飛び跳ねる動きに合わせてピアノを弾くと、D児は飛び跳ねるたびに「アー」「ウー」とタイミングを合わせて声を出す。</p>
持続的 関係性	<p><セッション17 (25週目)> ドラムを使った即興活動では、ドラムを挟んでD児とThは向き合って叩く。</p> <p><セッション32 (50週目)> 動作を付けて歌いながら遊ぶ活動では、《やまごやいっけん》の遊びの途中で、鉄砲を打つ場面になると、D児は自分からThの手を取り、自分の腹に持っていく。</p> <p><セッション40 (70週目)> 動作を付けて歌いながら遊ぶ活動では、《はちべえさんとじゅうべえさん》(わらべうた、阿部直美編曲)を行う。曲の途中で両手を前に出して「ハッ」と驚く場面では、D児は「ハッ」の少し前から笑みを浮かべ、その部分になるとThとタイミングを合わせて「ハッ」と声を出す。</p> <p><セッション63 (82週目)> ピアノを使った即興活動を初めてする。D児は両手で同時にピアノを叩く。《なべなべそこぬけ》の旋律をThが弾くと、D児はすぐにピアノの椅子から立ち、Thを引っ張ってなべなべの身体動作をするように誘う。D児は身体動作を一回するとピアノの椅子に戻って再度自分からピアノを弾き始める。</p> <p><セッション84 (142週目)> カードを見ながらリズムを叩く絵カードリズム打ちの遊びで、D児はバナナのカードを見て3打叩き、最後の1打で「ナ」と発声する。次にThがきゅーりの絵カードを見せると、ドラム面を撫でるような動作をしながら「キュー」と発声する。身体を動かす活動では、D児は《なべなべそこぬけ》の音楽になると、実習学生の元へ行き、「ハー」と声を出し、両手を自分から差し出す。Thが「一緒にしようね」と言うと、D児はスキップになって部屋の中央に行き実習学生に両手を出す。D児は「なべ、なべ」の拍に合わせて、前屈しながら「ハーハー」と歌い踊る。</p>

4-5 ケース4

4-5-1 B児のプロフィール

<クライアント> B児（女児、開始時2歳9ヶ月）

<開始時の主訴> 言葉の遅れ

<開始時の様子> 部屋中を動き回り多動傾向が見られる。新版K式発達検査を実施するが、着席行動を取ることができず、測定不能の状態である（0週目）。

4-5-2 セラピーの方法

<開始時に設定した目標> 音や音楽を通して、コミュニケーションの糸口を見つける。

<セラピーの構成> 個人セッションを、月に3回、1回につき50分行った。Thは1名。

<セラピーの内容> 呼びかけ歌、遊具を使って遊ぶ活動、ドラムを使った即興活動を行う。

4-5-3 B児の経過

B児の個人セッションを、合計28回行った。ここでは、B児の声の生成に重要な意味を持った8つのセッションを取り上げて記述する（表5 ケース4（B児）の関係性の変遷参照）。

表5 ケース4（B児）の関係性の変遷

	④ B児（自閉症タイプ）
関係性なし	<p><セッション1（0週目）></p> <p>B児は母親と来校するが同室にいることはできず、部屋を飛び出して走り回る。B児はThに視線を向けることは無い。「こっちおいでBちゃん」と母親が手で合図をして呼ぶが、母親を振り返ることもなく走り回る。B児は、部屋に入るとおもちゃ箱の中から電車のおもちゃを見つけ、1、2秒おもちゃに触れるが、次には模型のりんごを取り出し、落ち着きなく次々とおもちゃを替えていく。Thは呼びかけ歌を作り歌で呼びかけるが、B児は無表情で全く反応しない。</p> <p><セッション2（2週目）></p> <p>B児は、Thが近寄ると身体をかわすように、他の方を向いて動き出すことを数回繰り返す。Thは、即興で《呼びかけ歌》を作って歌いかけるが反応せず自分勝手に部屋をうろうろと歩き回る。</p>
瞬間的関係性	<p><セッション6（9週目）></p> <p>B児は、キーボードを弾きながら呼びかけ歌を歌っているThをちらちらと見始める。Thが途中で歌を止めると、後ろを向いていたB児は振り返りThと一瞬目が合う。セラピストは、目が合うと呼びかけ歌を再度歌い始める。</p>
断続的関係性	<p><セッション11（17週目）></p> <p>ドラムを使った即興活動を行うために、ドラムを2つ並べ、B児を誘いかける。B児はドラムの前にマレットを持って立ち、2つの太鼓を挟んで向かい合う。B児が叩き始めた瞬間、Thも同じ速さと音量で叩き始める。二人は10秒程同時にドラムを叩いた後、Thが一瞬息を吸ってマレットを大きく振り上げると、B児もマレットを振り上げ、「ふっ」と聞こえる息をはいてThと同時にドラムを叩く。B児は叩き終えた瞬間、Thを見て白い歯を見せる。</p>

持続的 関係性	<p><セッション12 (18週目)> 室内滑り台を滑り降りるB児の動作に、Thはキーボードを使ってグリッサンドで音を付ける。B児は、滑り終えた後、「アー」という興奮したような声を出しThを一瞥する。</p> <p><セッション15 (22週目)> B児はThをじっと見た後、滑り台を指さし「こっち」と声を出す。Thはその要求に応えず、ドラムを使った即興活動をさせようとしてマレットを渡すと、B児は横を向いて「いや」と発し滑り台に向かって走っていく。B児は1回滑り台を滑り降りた後、再度ThがB児にマレットを渡すとドラムの前に立つ。ドラムを使った即興活動では、B児はすぐに叩き始め、「せーの」というThの声かけの次の1打で叩くことを終える。叩き終えた瞬間、B児はThを注視し、一瞬微笑む。そして、次の瞬間には、B児はマレットを振り上げ、振り上げたマレットをドラムの面のすぐ上で止める。この動作に対してThが「アレッ」と言って、身体を横にひねって転げる動作をすると、B児はそれを見て「アハハハ」と笑い始める。</p> <p><セッション19 (30週目)> B児は、入室すると突然テレビの子ども番組で流行している歌を歌い始める。Thが驚いた表情をして「Bちゃん上手」と拍手すると、B児はThを見て、再度単一的な音程で歌う。その後、Thが楽器を探していると、B児はThに近寄り「てんてい」と呼びかけ、Thの肩を優しく叩く。</p> <p><セッション28 (48週目)> Thの歌う呼びかけ歌に対して、自分で創ったリズムで応答する。絵描き歌をThが歌い始めると、側にあった黒板に「びっころー、ぼろりー」と単一的な音程で歌いながらキャラクターの絵を笑顔で描く。一曲終わるとThに向かって「ほらてんてい」と黒板を指さして自ら描いた絵を見せようとする。</p>
------------	---

4-6 ケース5

4-6-1 C児のプロフィール

<クライアント>C児(男児、開始時4歳3ヶ月)

<開始時の主訴>言葉の遅れ

<開始時の様子>入室するなり、部屋中の楽器を強い調子で叩き、走り回る。新版K式発達検査を実施するが着席行動を行うことができないため、測定不能。言語・社会面は、1歳レベルの発達であることが分かる(0週目)。

4-6-2 セラピーの方法

<開始時に設定した目標>音や音楽を使って、コミュニケーションすることの楽しさを知る。

<セラピーの構成>個人セッションを、月1~2回、1回につき50分行った。Thは、Th1名、Co-Th1名。

<セラピーの内容>歌を歌う活動、音や音楽を聴きながら身体を動かす活動、遊具を使って遊ぶ活動(スクーターボード、トランポリンなど)、ドラムやシンバル、ツリーチャイム等を使った即興活動、既成の曲に合わせて楽器で演奏する活動を行う。

4-6-3 C児の経過

C児の個人セッションを、合計24回行った。ここでは、C児の声の生成に重要な意味を持った6つのセッションを取り上げて記述する（表6 ケース5（C児）の関係性の変遷参照）。

表6 ケース5（C児）関係性の変遷

	⑤ C児（自閉症タイプ）
関係性なし	<p><セッション1（0週目）> C児は入室するなり木琴やテンブルブロックを自由に叩き回る。Thが、木琴で《かえるの合唱》を弾きながら歌うと、C児は嫌がってThの髪を引っ張る。音楽を聴きながら身体を動かす活動では、C児は母親と一緒に楽しそうに動く。笛が鳴ったら積み木の椅子に上がるという活動では、ルールをすぐに理解して嬉しそうに椅子に上がる。Thが「上手にできたから まーる」と言って両手で輪を作ると、C児はすぐに動作を真似る。</p>
瞬間的関係性	<p><セッション1（0週目）> スクーターボードの活動では、「もう1回する人？」とThがたずねると、C児は人差し指を立てて、Thに見せ要求を示す。</p>
断続的関係性	<p><セッション3（9週目）> スクーターボードの活動を1回行った後、Thが「もう1回する人」とたずねると、C児は「かい」と声を出す。歌う活動を好まず、Thがピアノを弾いて歌うと、C児は走ってきてピアノのふたを手荒く閉める。身体を動かす活動やドラムを使った即興活動へ移る際、Thが「動こうね」や「太鼓トントンしようね」と言語で指示を出すとC児は反応しない。実際に楽器が出てくると活動が分かる。</p> <p><セッション7（17週目）> スクーターボードの活動では、曲が終わってスクーターボードが止まると、C児は「おしまい」と発音する。その後、C児はThを見て自分から「もういっかい」と明瞭な発音で要求する。</p>
持続的関係性	<p><セッション9（22週目）> 《アイアイ》の掛け合いの部分で、C児は「アイアイ」と明瞭に発音し、タイミング良く1本調子で歌う。音や音楽に合わせて身体を動かす活動で、C児の動きに合わせてThが音楽を付けると、C児は「アー」や「オー」と笑顔で声を出す。音と動きの活動では、Thをじっと見て、出てくる音に合わせて身体を動かす。Thが「パパパー」と歌いながらボンゴを叩くと、C児がThの持つボンゴを取りあげて持ち、Thと役割を交代する。C児の叩くボンゴに合わせて、Thが「パパパー」と歌いながら両手を動かして踊るとC児はケラケラと笑い始める。</p> <p><セッション13（30週目）> Thが木琴で《かえるの合唱》の前奏を弾くと、C児は一人で1曲全部を「ア」の声で歌う。</p> <p><セッション21（42週目）> 歌詞に動作を付けて遊びながら歌う活動の《おふろ》をする。Thが、「さあさ、おふろにはいろかな。Cくんがおふろに一」と歌いながら、両手でおふろに見立てた輪を作り手を入れるように促すと、C児はためらいながら両手をThの輪に入れる。すかさずその動作に「ざぶん」とThが声で音付けした後、「アチチのチー」と言いながらC児の身体を高く持ち上げると、C児は「アハハハハ」と笑い声をあげて《おふろ》の遊び歌を何度も催促する。</p>

4-7 ケース6

4-7-1 J児のプロフィール

<クライアント>J児(女児、8歳5ヶ月)

<来所時の主訴>コミュニケーションスキルの欠如

<開始時の様子>ニコニコと微笑みながら来室する。ピアノの側へ来て、両手で鍵盤を数打叩いてウロウロと歩き始める。その歩く動きにThが音楽を付けると泣き始める。新版K式発達検査を実施する。積み木を出すと、口にくわえなめ続ける。コップやびんなど、提示する検査用具は全て口にくわえ測定不能となる(0週目)。

4-7-2 セラピーの方法

<開始時に設定した目標>始まりと終わりの意識を身につけることができるよう、物事を認知する力をつける。

<セラピーの構成>個人セッションを、月2回、1回につき45分行った。Thは、1名。

<セラピーの内容>音楽を聴きながら身体を動かす活動、ピアノによる即興活動、ドラムやシンバルなどを使った即興活動、音符を書く活動、遊具を使って遊ぶ活動を行う。

4-7-3 J児の経過

J児の個人セッションを、合計18回行った。ここでは、J児の声の生成に重要な意味を持った3つのセッションを取り上げて記述する(表7 ケース6(J児)の関係性の変遷参照)。

表7 ケース6(J児)の関係性の変遷

⑥ J児(自閉症と全体的発達遅滞との複合タイプ)	
関係性なし	<p><セッション1(0週目)> J児は、フラフラとピアノの位置へ行き、両手で鍵盤を数打叩いた後、ウロウロと動き回る。ThはJ児と一緒にピアノへ行き、二人で並んで座りピアノを弾く。すぐにピアノから離れたJ児は、セラピールームをウロウロと歩く。</p>
断続的關係性	<p><セッション1(0週目)> ThがJ児の歩く速度に合わせてピアノを弾くと、「ウエーン」と泣き始める。J児はしばらくすると泣きやむ。Thは再びウロウロと歩くJ児のテンポに合わせてピアノを弾き始める。J児は、Thを見ながら意識して歩き始める。しばらく歩くとJ児は急に走り出す。その動きに合わせて、Thが連打してピアノを弾くとJ児は「ワー」と言って「アウアウ」と言いながら泣き始める。J児は母親の側へ行き、母親の髪を触ると落ち着きを取り戻し、再び歩き始める。</p>
持続的關係性	<p><セッション1(0週目)> Thが慌てて《アイアイ》を弾くと、J児は突然親指と人差し指をくっつけながら、拍に合わせてニコニコと歩き始める。「アイアイ」と速いテンポで歌われる部分では、J児は「アーアー」と甲高い声を出す。</p> <p><セッション5(11週目)> 身体を動かす活動では、J児はスキップをしながら走る。J児のスキップに合わせて、Thが付点のリズムでピアノを弾くと、J児は拍の頭で「ハ ハ ハ ハ」と声を出す。積み木を積む活動では、5個まで自分から積んでいく。その後、木玉を転がして積み木を倒す活動をする。J児はボーリングのように玉を転がし、積んだ積み木が倒れると、「ワー」と言う歓声をあげる。</p>

持続的 関係性	<p><セッション14 (30週目)></p> <p>J児はThの弾く《さんぼ》の音楽に合わせて歩く。J児は曲の拍に合わせて「オーオーオーオー」と声を出しながら笑顔で歩く。ピアノを使った演奏の活動では、《サザエさん》をThが弾くと、J児は曲に合わせて両手で鍵盤を押さえながら身体を揺らす。Thが「指1本」と言うとJ児は人差し指を出し鍵盤を所々鳴らす。次にThが《げんこつやまのためきさん》を弾くとJ児は「ハーハーハーハー」と拍に合わせて声を出し、自ら指1本を出す。その後J児はグリッサンドを始め、その動きをThが「まてまて」と言いながら真似ると「アハアハ」と笑い声を出し始める。J児は、追いかけるThの指から逃げて高音までグリッサンドをすると悪戯っぽい目でThを見て笑う。</p>
------------	--

4-8 ケース7

4-8-1 E児のプロフィール

<クライアント> E児 (女児、開始時2歳5ヶ月)

<開始時の主訴> 全体的な発達の遅れ

<開始時の様子> 自分でバランスをとって数秒の間独り立ちが可能である。「アヤワヤムニャウワウニ」のような意味不明の音声を早口で話す。「ちょうだい」などの簡単な言語を理解することはできないが、セラピストをじっと見つめる。遠城寺式・乳幼児分析的発達検査を実施した結果、全領域において9ヶ月から10ヶ月の発達レベルであり、全体的な発達の遅れが見られる(0週目)。

4-8-2 セラピーの方法

<開始時に設定した目標> 音や音楽を用いたコミュニケーション活動やリズム活動を行うことで、理解できる言語が増え、身体的な動きが増えるようになる。

<セラピーの構成> 個人セッションを、月2~3回、1回につき30分~45分行った。Thは、Th1名、Co-Th1名。

<セラピーの内容> 歌を歌う活動、音や音楽を聴きながら身体を動かす活動、遊具を使って遊ぶ活動を行う。

4-8-3 E児の経過

E児の個人セッションを、合計62回行った。ここでは、E児の声の生成に重要な意味を持った7つのセッションを取り上げて記述する(表8 ケース7 (E児)の関係性の変遷参照)。

表8 ケース7 (E児)の関係性の変遷

	⑦ E児 (全体的発達遅滞タイプ)
断続的 関係性	<p><セッション1 (0週目)></p> <p>E児はにっこりとして表情は良く、初対面であるThを見ても人見知りをしない。母親がE児を床に下ろし、座位を取らせようとする、E児は両足を前に出してしっかりと座る。次に、ThがE児の両手を保持して立たせると、E児はしっかりと両足を支える。その後ゆっくりとE児から両手を離すと、E児は自分でバランスをとって数秒立つ。ThがE児を立たせようとしている間、E児は「アヤワヤムニャウワウニ」</p>

断続的 関係性	<p>のような意味不明の声を早口で話す。自由に楽器に触れている場面では、楽器箱から鈴をとって鳴らしているE児に、Thが「ちょうだい」と言って手を差し出すが、E児は言葉かけとは無関係に鈴を鳴らし続ける。5分程過ぎるとE児は鈴を放り捨てる。他の楽器を探しに行こうとするE児をThは抱きかかえ、向き合って膝にのせ、E児のからだを揺らしながら、《かえるの合唱》を歌う。E児は驚いた表情をして、口元をぐっと締めてThを注視する。身体を動かす活動になると、E児は動こうとせず、両手を出してThを見ながら抱っここの要求をする。ThがE児を抱いて動くとき微笑みながら、「アー、ヒー」と歓声を出す。ドラムを使った即興活動では、Thがドラムの上にE児の両手をのせ、やりとりを行おうとするが、E児は泣いて拒否する。</p> <p><セッション3 (3週目)></p> <p>E児はThを見るときすぐに両手を出して「ンーン」と抱っここの要求の動作と声を出す。Thは抱きかかえた状態で《かえるの合唱》を歌いかけたり、身体を動かす活動を行う。Thが「ひとりで」と言ってE児を床に降ろすと「ウアーン」と悲しそうな声で泣き始める。E児はセッションの間Thに抱かれたままの状態以降りようせず、自発的に動いたり、楽器に触れたりなどの行動は見られない。</p>
持続的 関係性	<p><セッション4 (5週目)></p> <p>ドラムを使った即興活動では、Co-Thの膝に抱かれた状態で、ドラムを使った活動を行う。Thは、E児の両手をドラムにのせ、スティックで連打する。E児は音の振動が始まった瞬間、驚いた表情をする。E児は両手をドラムにのせたまま、上を向いて目を閉じ「ウエーン」と甘えた声を出しながら泣く。E児はしばらく「ウエーン」と言っているが、Thが続けて連打をしていると、Thの目をじっと見始める。Thがさらに連打を続けてピタリと音を止めると、E児はおやっという驚きの表情をしてThを注視する。少しの間を空け、再度連打を始めるとニヤリとしてThを見る。次に、ThはE児を膝に乗せ対面して座り、膝を揺らしながら、《アイアイ》を歌う。E児は、じっと座ってThの口元を真剣な表情で見つめている。曲頭の「アイアイ」のフレーズの後、Thとしっかり目を合わせたE児は、歌の応答の部分で微かにうなづく。2度目に「アイアイ」が出てくると、E児はしばらく間を置いて考えているような表情をした後、首を縦に振る。この動作を受けてThは、曲の次のフレーズを膝を揺らしながら歌い始める。テンポ感が出てくる「アイアイ」の部分になると、E児はThの膝の上で自分から飛び跳ね始める。E児が飛び跳ねると、Thは次のフレーズを歌い始める。メロディーが曲頭の「アイアイ」に戻った時、E児はThの口をじっと見て、その開き具合に自分のくちの開きを合わせようとする。続いてThはE児をより近くに抱き寄せ、《かえるの合唱》を歌い始める。E児は、食い入るようにThの顔を見ている。Thは《かえるの合唱》の最後のフレーズの「ゲロゲロゲロゲロ、クワックワッ」の3回クワッと言うべき所を2回でストップして息を吸うと、少しの間の後にE児は小声で「クワッ」と発声する。</p> <p><セッション5 (6週目)></p> <p>身体を動かす活動では、Co-Thに両脇を支えられたE児の足の動きに合わせてThがピアノを弾くと、E児は1、2歩歩き始める。</p>

持続的 関係性	<p><セッション6 (9週目)> ドラムを使った即興活動においてThが「せーの」という声かけと共に息を吸うと、E児は大きく手を振り上げているThを見つめ、同時に一打タイコを叩く。次に、ThがE児にさるの絵カードを見せながら《アイアイ》の曲頭を「アーアイ」と歌うと、E児はすぐに呼応してThと同じ音程で「アーアイ」と歌う。Eは音程が上がる部分では、声を上ずらせながら「アーアイ」と歌う。</p> <p><セッション11 (16週目)> ドラムとシンバルを使った楽器の即興活動において、E児はドラムを5打叩いた後シンバルをジャンと一打叩く。E児は叩き終わると満足そうな表情でThを見る。その後、Thが誉めるとE児はにこりとする。絵カードを見て言葉の音に合わせてリズムを叩く活動では、E児はりんごの絵カードを見て、「りんご」と言いながら3打ドラムを叩く。「みかん、バナナ」と絵カードを見ながら果物の名前を言う。おわりのあいさつでは、「さようなら」と言いながら頭を下げる。</p> <p><セッション21 (27週目)> 絵カードを使ったマッチング(言葉と絵カードを一致させる遊び)の活動を行う。Thが「バナナ」と言うとE児は、「バナナ」と言いながらバナナのカードを取り、Thに渡す。次に、E児は床に並べてあるカードを「いちご、りんご、みかん、ぶどう」と名称を言いながら、次々とカードを取ってThに手渡す。歌を歌う活動では、木琴を介してE児とThが向かい合って座る。Thが《こぶたぬきつねこ》の前奏を弾くと、E児はThを見つめ、前奏に呼吸を合わせて「こぶた」と歌い始める。E児の声に呼応して、Thが「こぶた」と歌うと、次のフレーズをE児が歌い1曲を二人で交互に歌う。歌い終わると、E児は「フッ」と首を傾げ、照れた笑いをする。</p>
------------	--

4-9 ケース8

4-9-1 G児のプロフィール

<クライアント>G児(女児、開始時3歳6ヶ月)

<来校時の主訴>身体機能の回復

<開始時の様子>入室時、よろけるように歩きながら、落ち着き無くフラフラと動き回る。手をすぐに口に持っていき、口唇レベルの感覚を楽しむ。母親によると家庭では、「オータータン、マンマ」など簡単な単語を発するということである。遠城寺式・乳幼児分析的発達検査を実施し、全領域1歳レベルの発達状況である(0週目)。

4-9-2 セラピーの方法

<開始時に設定した目標>音や音楽による感覚的な刺激を行うことで、運動機能や認知機能を回復する。

<セラピーの構成>個人セッションを、月2回、1回につき50分行った。Thは、Th1名、Co-Th1名。

<セラピーの内容>これまで好きであった歌を歌う活動、音楽を聴きながら身体を動かす活動、ドラムやシンバルを使った即興活動を行う。

4-9-3 G児の経過

G児の個人セッションを、グループセラピーと並行して行われるまでに合計8回行った。ここでは、G児の声の生成に重要な意味を持った4つのセッションを取り上げて記述する(表9 ケース8(G児)の関係性の変遷参照)。

表9 ケース8 (G児) の関係性の変遷

⑧ G児(全体的発達遅滞タイプ)	
断続的 関係性	<p><セッション1 (0週目)> G児は、セッションルームを落ちつきなくフラフラと動き回る。表情は良く、Thに何度も視線を送る。セラピストは、楽器や遊具を出し、どのように遊ぶかを観察する。G児は、楽器や遊具を1つのものから次のものへと次々と変えていく。</p> <p><セッション3 (7週目)> 始まりのあいさつを行うために、椅子に座るよう促すとThと向かい合って座り、しっかりと視線を合わせる。Thが絵カードを見せながら、《さんぼ》と《アンパンマンのマーチ》の歌を歌うとG児はじっとカードを見る。Thが2枚の絵カードを見せながら木琴で、《さんぼ》を弾くとにやりとしてトトロを描いた絵カードを取る。</p>
持続的 関係性	<p><セッション6 (17週目)> 《たのしくハイハイハイ》の歌をThが歌うと、G児は「ハイ」と声を出した後、手を挙げる。歌を歌う活動で《かえるの合唱》の「グワッ」の部分でThが息を大げさにすって声を出すように促すと、G児はすぐに「グワッ」と声を出す。《げんこつやまのたぬきさん》では、最後の「またあした」の「た」の部分に息を合わせて「たー」と歌う。</p> <p><セッション8 (28週目)> G児は、《さんぼ》の絵カードを見て「とと」と答え、その後絵カードを手に持ち、トトロの絵の部分に頬を寄せ「すきすき」と言う。《かえるの合唱》では、G児はグワグワの部分で「グワッ グワッ グワッ グワッ」と連続して声を出す。</p>

4-10 ケース9

4-10-1 F児のプロフィール

<クライアント> F児 (女児、開始時3歳5ヶ月)

<来校時の主訴> コミュニケーションの困難さ

<開始時の様子> 新版K式発達検査を実施し、DQ20。運動及び認知、言語面に重度の発達の遅れが見られる (0週目)。

4-10-2 セラピーの方法

<開始時に設定した目標> 遊びの楽しさを体験することで、物事への興味、関心を高める。

<セラピーの構成> 個人セッションを、月2回、1回につき50分行った。Thは、Th1名、Co-Th1名。

<セラピーの内容> 音や音楽を聴きながら身体を動かす活動、打楽器による即興活動、遊具を使って遊ぶ活動 (絵カード、積み木、パズルなど)、既成の曲に合わせて楽器で演奏する活動 (《ウルトラマンのうた》の曲に合わせて、横一列に並んだ楽器を順番に叩き、シンバルで終わって曲を構成していく活動) などを行う。

4-10-3 F児の経過

F児の個人セッションを、合計5回行った。ここでは、F児の声の生成に重要な意味を持った3つのセッションを取り上げて記述する (表10 ケース9 (F児) の関係性の変遷参照)。

表10 ケース9 (F児) の関係性の変遷

⑨ F児(肢体不自由タイプ)	
断続的 関係性	<p><セッション1 (0週目)></p> <p>F児はThを見ながら、よろよろとしながらも独歩で入室する。2、3歩のめりながら歩いては座り込む。Thがおいでと両手を広げると、F児は自らThの手の中に身を委ねる。その姿勢のままThと視線を合わせ、F児は「プー」と声を出しながら両唇を震わせ始める。Thが同じように「プー」と唇を震わせると、F児はThの顔をじっと見て「プー」と返す。しばらくの間周囲を見回した後、F児は急にThを見て「カッカッカー、タッター」と声を発する。Thが同じ高さ、速さの声で真似るとF児は目を大きく開き、頬を緩め「ウワー、プルプル」と続ける。音を聴きながら身体を動かす活動では、立位や座位が安定しないため、仰向けの姿勢になる。F児が速いテンポで両手足を動かし、それに合わせてThはボンゴを速いテンポで叩く。そのボンゴに合わせてF児の足下でThが「パパバヤー」と歌いながら踊ると、F児はThを直視し、興奮して両手足をばたつかせ始める。F児は、「パパバヤー」の声に合わせて「プルルルルー、プルルルルー」と息を合わせながら声を出し始める。Thの「パパバヤー」に続き、F児は素早いテンポで「プルプルプルプルプル」の声を出す。一瞬の間が空き、F児はThを見ると、再度「プルルルルル」と声を出す。Thは同じ声で真似た後、踊ることを止める。F児は不思議そうにThを見るとゆっくりとしたテンポで「プー」と言いながら両手を振るわせる。一瞬の間を置き、二人は一緒に「プー、パパ、ハー」と声を出す。F児は突然「すごい」と言った後、動きを止める。</p>
持続的 関係性	<p><セッション2 (4週目)></p> <p>F児は、入室するなりThの顔を見ると「プー」と唇を震わせる。Thが、F児の顔を見て「プー」と唇を震わせながら返すと、再度「プー」と発する。動作を付けながら歌って遊ぶ活動では、ThとF児が向かい合って座ると、F児はThの歌う歌には反応せず、自分の好きなどころで、Thの顔を見て「プー、プー」と言う。音楽を聴きながら身体を動かす活動では、F児は音とは無関係に部屋を斜めによろけながら歩いては止まり、Thを見て「プー」ということを繰り返す。そのたびにThは「プー」と声を返す。</p> <p><セッション5 (12週目)></p> <p>入室するなり、F児はピアノによじ登ろうとする。ThがF児を膝に抱きピアノの前に座ると、F児は両手でピアノを叩き始める。そのテンポに合わせてThが《かえるの合唱》を弾くと、F児はThの両手の甲の上に自分の両手をのせ、メロディーに合わせてリズムを取る。1曲終わるとF児はThの手を握り、その手を持ち上げ再度弾くように催促する。ドラムを使った即興活動では、Thがマレットを握らせると、F児は振り捨てる。両手をドラムにのせると、F児は身体を揺らしながら円を描くように手を動かし始める。その手の動きに合わせてThがドラムを叩くと、F児の手の動きとThの手の動きが一致し始める。F児の身体が前傾する時には、Thはドラム音を強くし、後ろに傾く時にはドラム音を小さくする。突然、動きを止めたFは、「ウオー」と驚いた表情をしてThを見て声を出す。Thが「びっくりしたねー」と言うと、F児は再び身体を揺らし始める。F児は前傾するときに、「アー」と言う息の混じった声を出し始める。F児は後ろに傾くときには息を吸い、前傾するときには、ドラム音に合う呼吸で「アー」とタイミング良く声を出す。終わりを知らせるために、Thがシンバルを目の前に提示すると、F児はシンバルへ視線を注ぎ、両手でシンバルを叩く。F児は驚いた表情をするが、Thが「じょうずー」と言いながら拍手するとF児は「アハッ」と言ってにやりと笑う。</p>

4-11 ケース10

4-11-1 I児のプロフィール

<クライアント> I児（男児、開始時5歳0ヶ月）

<開始時の主訴>遊びの広がりなさ

<開始時の様子>首は座っているが、1人で座位や立位を取ることができない。母親に抱かれたI児はセラピールームに入室するなり泣き始める。泣き声は小さく、息を吸いながら泣き声をあげるが、その後吸った息を吐くことができず、身体を硬直させてチアノーゼを起こす。10秒ほど息をとめた後フーッと息を吐く。息を吐き出すと速い呼吸をしながら小声で泣き始める。初回の行動観察から、最重度の身体的、知的な発達遅れが見られる。快と不快の感情は、泣くことによって表現され、不快な状態は緊張に繋がり、緊張すると不快に繋がるということが観察できる（0週目）。

4-11-2 セラピーの方法

<開始時に設定した目標>身近な歌や音を通して、様々な感覚器官への多感覚的な刺激によって色々な体験をし、表現の幅を広げる。

<セラピーの構成>個人セッションを、月1～2回、1回につき50分行った。Thは、Th 1名、Co-Th 1名。

<セラピーの内容>触覚を使った即興活動（鉄琴やメジャーコードに調弦されたギター、スリットドラムなどに直接触れて音の振動を体感して遊ぶ）、音や音楽を聴きながら身体を動かす活動、ドラムを使った即興活動を行う。

4-11-3 I児の経過

I児の個人セッションを、合計19回行った。ここでは、I児の声の生成に重要な意味を持った8つのセッションを取り上げて記述する（表11 ケース10（I児）の関係性の変遷参照）。

表11 ケース10（I児）の関係性の変遷

	⑩ I児(肢体不自由タイプ)
瞬間的 関係性	<p><セッション1（0週目）></p> <p>I児は、入室するなり泣き声をあげ、身体を硬直させ、えびのように反り返る。ThはI児の側に行き、身体をさすりながら呼びかけるが、I児の身体の緊張はとれず、I児は泣き続ける。</p>
断続的 関係性	<p><セッション2（2週目）></p> <p>Thが「Iくんこんにちは」と言いながらI児に近寄ると、Thの顔を見て小声で「アー」と声を出す。I児とThは、すぐに鉄琴を挟んで向き合い、ThがI児の両手を鍵盤にのせ、両手の置かれている部分の鍵盤を叩き、振動刺激を送ると笑顔になる。Thが鍵盤を弾きながら《トントンアンパンマン》を歌い始めると、大きく口を開けて笑い始める。曲の最後でThがくすぐる動作をすると、I児は「アー」と興奮した声を出す。次の瞬間には身体全体が緊張して、えびのように反り返る。Thが歌うのを止めても反り返った状態は続き、連打する回数を多くすると、I児は「アハアハ」と小声で笑い始める。Thが鍵盤を弾く手を止め、「リラックスー」と言いながらI児の身体をマッサージすると、身体の緊張がとれ、座位に戻る。</p>

断続的 関係性	<p><セッション4 (24週目)> I児とThは、スリットドラムを挟んで向かい合い、I児はスリットドラムの上に両手を置き、Thはマレットでスリットドラムを叩く。叩くリズムに合わせてThが《ラレラ》を歌うと、身体を緊張させてThをじっと見つめる。次にThが《かえるの合唱》をこぶしを回しながら歌うと突然Iは白い歯を見せ、「アハアハアハ」と声を立てて笑う。</p>
持続的 関係性	<p><セッション7 (36週目)> 触覚を使った即興活動では、I児とThは向き合い、ThはI児の両手をドラム面にのせ両手へ振動刺激を送る。途中でThが「へー」と言って息を吸うと、I児はThを見つめ、その吸う息に合わせてゆっくりと片手を挙げ始める。I児は挙げた手をゆっくりと下ろしながら、息を吐く。それに合わせてThが「フー」と音付けをする。I児の手がドラム面に着いたとき、Thはその動きに合わせて音を出す。その間、I児はThをじっと見つめ、音が出た瞬間驚きの表情をする。</p> <p><セッション9 (44週目)> I児は両手をスリットドラムの上ののせている。Thが《ラレラ》を速いテンポで歌い始めると、徐々に身体全体が緊張し始め、えびのように反り返り始める。緊張が強くなってきたので、Thが鉄琴に楽器を変えて、《ぞうさん》を歌い始める。I児はThの歌う《ぞうさん》を聞くと、えびのように反った身体から緊張がとれ始め、座位の姿勢に戻る。Thの歌う声に合わせて、I児は「アーアー」と声を出し始める。</p> <p><セッション13 (64週目)> 歌を歌う活動では、木琴を挟んでI児とThは向き合う。《アイアイ》を歌うために、Thは前奏を弾き始める。弾き始めるとすぐに、I児は口を開けて大きく息を吸ったり吐いたりし始める。Thが歌うと、I児は少し遅れて「アーアー」と連続した声を出す。I児は途中疲れたようにThをじっと見ているが、最後の音の前でThが大きく息を吸うと、「ハー」と合わせて声を出す。終わりのあいさつでは、ハンドドラムの上に両手をのせ、Thが、「さよ おな ら」とドラムを3打叩くと、I児はそれにタイミングを合わせて「アー アー アー」と声を出す。</p> <p><セッション16 (76週目)> I児は、母親の膝に抱かれた姿勢で鉄琴の上に両手をのせている。鉄琴を挟んでI児と向かい合って座っているThは、マレットでIが手を置いている部分の鍵盤を連打する。I児は、両手を鉄琴の上ののせたまま口を半分開け、目をキョロキョロさせている。Thが、I児を見ながら鍵盤を連打する手を止めると、I児は一瞬身体を緊張させ、じろりとThの顔を見る。Thがゆっくり息を吸って、再度連打を始めると、I児は自分が息を吸うときには右手をゆっくりと挙げ、息を吐くときには挙げた手をゆっくりと下ろすことを繰り返す。次にThは、Cのコードに調弦されたギターをI児の目の前に提示する。Thは、I児の左手を弦にかけ、《ギターの歌》を歌う。Thがゆっくりと歌い始めると、I児は「アウアウアウ」と突然息の混じった声を出し始める。1曲終わるとI児は声を出すのを止める。そしてI児は左手の弦から指を下に滑らし、歯を出して笑いながら嬉しそうに息を吸う。Thがフレーズの終わりで息を吸うと、I児も同時に息を吸い「アウアウ、ハー」とセラピストと一緒に声を出す。曲が終わるとI児はThを見て、顔いっぱい口を開け、前歯を出した笑い顔になる。</p> <p><セッション18 (80週目)> ギターを使った活動では、Thが《ギターの歌》を歌い始めるとすぐに、「アーアーアーアー」と連続した声を出し始める。ThがI児の声に合わせて、音高を変えたり、速さを変えながら歌うと、I児は「アウアウアウ」と声に抑揚をつけ、笑いながら歌い始める。その笑い声を「ハフハフ」と言いながらThが真似ると、I児は「アウアウアウ、ハフハフハフ」と連続した声を出す。</p>

5. 全体的考察

5-1 自閉症（広汎性発達障害）タイプにおける関係性と遊びとの関連

クライアントとセラピストの関係性に焦点を当てるため、関係性なし、瞬間的關係性、断続的關係性、持続的關係性の4つの關係性に分けて考察した。ケース1からケース6の自閉症（広汎性発達障害）タイプの子どもの場合は、クライアントとセラピストの關係性はない状態からセラピーが始まっている。その状態の中で行っている遊びは、トランポリン、スクーターボード、布を使ったゆれの遊び、振動の伝わる楽器などの感覚への刺激を伴う遊びであった。このような言語を伴わない感覚への刺激を伴った遊びは、瞬間的關係性や断続的關係性へと発展している。ウィニコット, D.W (1965) は、乳児と母親との關係から「抱っこ」(holding) することが、物理的に抱くということ以上に心理的な繋がりを持つと述べているが、ここで行ったプレイはクライアントとセラピストの關係性を促していった遊びであると考えることができた。更に、障害の程度が重い場合でも、非言語的な遊びによって持続的な繋がりが可能になり、歌遊びなどを経て、その後言語的な交流へと発達していったと言える。しかし、ケース3のD児、ケース4のB児、ケース5のC児のように発達指数が中・重度の場合は、断続的、持続的な二者關係が生じるまでには長い期間を要したと言える。

5-2 全体的発達遅滞タイプと肢体不自由タイプにおける関係性と遊びとの関連

全体的発達遅滞タイプのケースにおいては、初回から断続的な關係が可能となっている。遊びの種類としては、手遊び歌や絵カードを使った歌遊び、身体を使った遊びを通して次々と声が出され、その声はセラピストに意志を伝える声として機能していたと言える。全体的発達遅滞タイプのケース6のJ児、ケース7のE児、ケース8のG児は、人と人とが繋がるための、非言語的な形を提示することにより、その間を察知し、相手に応え遊びを発展するという力を持っていることが分かる。

また、ケース9のF児やケース10のI児に示した通り、肢体不自由タイプの子どもたちは、呼びかけに対してすぐに応答し、楽器の音を使った遊びや身体を動かす遊びを通して、持続的な二者關係が生じている。肢体不自由タイプで重度の場合には、発語には至っていないが、言葉に代わる声が出現し、歌遊びを楽しんでいたと言える。肢体不自由タイプの子どもたちが、關係性を深めながら、歌遊び、楽器遊びを楽しみ、そのことによって遊びが広がり始めていたと言える。

このような遊びの観点を鯨岡峻のコミュニケーション論から見てみたい。鯨岡 (1997) は、コミュニケーションを次のように定義している。「コミュニケーションとは、それぞれに繋合希求性と自己充実欲求を抱え、ある役割を担わされた主体と主体が出会い、そこで関わりをもち、その中で各自がその欲求の充足を目指しながら役割の実現を図り、互いに相手のことを分かり合おうとする営みである」(1997:153)。また、コミュニケーションが成立するためには、まず、二者が対面する關係にはいなければならない。そのためにはコミュニケーションが生まれるための場を作る事の重要性を説いている(鯨岡 1997:156)。全体的発達遅滞タイプや肢体不自由タイプのケースで行われた遊びは、コミュニケーションが生まれるための遊びの場を設定した結果、關係性が深まり更に遊びが発展していった。そしてこれらは、言語的な発達につながっていったと考える事ができた。

5-3 まとめ

これらのことから、障害のタイプに関わらず、初期のアプローチとしてクライアントとセラピスト間の二者の関係性の構築をはかることが重要であった。しかし、障害のタイプや程度によって、初期の支援の方向性とアプローチは異なり、更に、関係性が深まってきた後の発達援助には、二者から三者、四者というグループへのアプローチの重要性も示唆されるものであった。支援のプロセスを見極めながら、身体面や認知面の発達、更にコミュニケーションの発達など、発達援助の方向性を模索していくことが必要であると考えられた。

6. 結論

今回の研究において、114ケースの来校時の主訴や障害名から、障害児の臨床実践現場では、3つの発達のタイプに分かれる事を確認することができた。更に、発達のタイプに関わらず援助初期の二者の関係性の構築をはかることが重要であるが、そのタイプによってアプローチの方法は異なる。自閉症タイプでは、感覚を用いた遊びによって非言語的な交流が行われ、その非言語的な交流によってクライアントとセラピストの関係性が深まり、そのことによって言語的な交流へと発展する可能性があることを確認した。また、全体的発達遅滞タイプと肢体不自由タイプの場合には、初回から断続的な関係が可能となり、手遊び歌や身体を使った遊びによって次々と遊びが展開され、コミュニケーションとしての声や感情を表現するための声が出現していった。言語的交流に至るケースもあるが、重度の場合には非言語交流に留まっていた。この二つのタイプでは、関係性が深まることによって、遊びも次々と展開されていくことが確認できた。更に、二者から三者、四者というグループへのアプローチの重要性も示唆され、支援のプロセスを見極めながら、発達援助の方向性を模索していくことが必要であると言えた。

<参考文献>

- 1) 山下恵子・安東末廣 1998 『虐待を受けた幼児の施設での援助過程 臨床心理士を中心としたグループアプローチ』 宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター紀要第5号：81-90
- 2) 山下恵子・安東末廣 1999 『被虐待児の臨床的援助に関する研究 ～施設における2つの援助ケースの検討～』 宮崎大学教育学部教育実践研究指導センター紀要第6号：49-60
- 3) 山下恵子・安東末廣 2001 『被虐待児の援助構造の検討 ―音楽療法の目的と位置付け』 宮崎大学教育文化学部教育実践研究指導センター研究紀要第8号：77-81
- 4) 山下恵子・安東末廣 2003 『被虐待児の臨床的初期援助の検討』 宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学 第9号：19-28
- 5) ウニコット, D.W 1965 『情緒発達の精神分析理論』 岩崎学術出版
- 6) 鯨岡 峻 1997 『原初的コミュニケーションの諸相』 ミネルヴァ書房
- 7) 鯨岡 峻 1999 『関係発達論の構築 問主観的アプローチによる』 ミネルヴァ書房
- 8) 山下恵子 2005 『声の生成プロセスについて ～ハンディキャップのある人を中心に』 お茶の水女子大学博士論文

(2010年4月20日受理)